

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00545

研究課題名(和文) 標示(ラベル)操作の可能性と課題：日英語の「構造標示の二重性」現象の分析

研究課題名(英文) Issues on LABEL: In view of the Multiple Representation Structures in English and Japanese

研究代表者

長谷川 信子 (Hasegawa, Nobuko)

神田外語大学・言語科学研究科・教授

研究者番号：20208490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：統語分析において、構造(階層性)と標示(ラベル)は構造構築上も意味解釈の上でも最も基本で不可欠なものと考えられてきたが、統語操作の最小化を旨とするMinimalist Programでは、ラベルさえも、構造構築(派生)の過程で決定されるとする方向性が打ち出された。それにより、派生の出発点から最終構造に至る過程が複数可能となり「構造標示の多重性」を示す現象の存在が予測されることとなった。

本研究では、そうした「構造の二重性」を提示すると分析できる現象を考察し、ラベル操作の可能性と課題を明らかにすることを旨とし、具体的には、英語の分詞節、日本語の「の」節「と」節、VP内部構造などを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統語構造に不可欠なラベル標示のあり方と機能を、日本語と英語の統語現象から考察することで、ミニマルな操作・構造を目指す理論的要請が、どの程度経験的に裏付けられるかを考察し、近年、ややもすると「理論的整合性・望ましさ」に比しないがしろにされている記述的・経験的考察に重点を置き、以前の統語研究の蓄積を生かし、かつ、「構造の二重性・曖昧性」の観点から新たな一般化を提示する形で、検証し、統語構造におけるラベルの役割、統語分析と意味機能の関係について、派生のlook aheadの必要性にも言及して問題提起を行った。理論的整合性と同時に記述的妥当性を追求することの重要性を改めて論じた。

研究成果の概要(英文)：Hierarchical structure and labels on nodes are considered to be most fundamental in syntax. In the Minimalist Program enterprise, where the reduction of syntactic mechanisms is aimed, even node labels, which were considered to be inherent and projected through the derivation in earlier models, are considered to be derived, which means that multiple syntactic representations are possible from the single source as long as the operation of Label allows either label in the binary structure to be projected

and the structure with multiple syntactic representation is predicted. Free relatives (DP label) and Indirect Wh-Questions (CP label) are such examples.

In this project, more cases of this type are explored and the dual category of Gerundive Participials (DP and CP) in English and the No-clauses (DP and CP) and To-clauses (Complement CP and Adjunct Bare Quotative CP) are accounted for via Label operations.

研究分野：言語学

キーワード：統語論 ミニマリストプログラム ラベル カートグラフィ 分詞 主要部内関係節 と節 結果構文

## 1. 研究開始当初の背景

統語構造における最も基本的な操作・概念は、構造構築と構造を構成する要素の標示(ラベル)である。生成文法初期では、その2つは1つの操作「句構造規則」が担ったが、理論の発展に従い(統語操作と概念をどこまで単純化・ミニマルにできるか、つまり、言語習得にかかわる *Plato's problem* に整合可能な理論構築への試み)、構造構築は2つの要素の併合(Merge)、構造標示は、併合された要素の素性踏襲のアルゴリズムである Label へと単純化された。それに伴い、以前の理論(特に、標準理論後に統語論を大きく発展させた GB (PP) 理論)では、可能ではなかった派生の途中(Merge の段階)でのラベルの変更・曖昧性を Label 操作が許すこととなった。この方向は、60年以上にわたる生成文法発祥以来の理論の発展上は望ましく、当然の方向性なのだが、生成統語論が経験科学である以上、言語現象による方向性の裏付けが必要である。本研究課題は、日本語と英語のデータ、およびこれまでの理論では解決できていなかった問題に新たな視点を持ち込むことにより、ラベル操作の「経験的な裏付け」を検証することにある。

理論の発展を振り返ると、従来の理論とは異なる視点で、異なる言語の現象を巻き込み、これまで「例外」とされてきた現象や考え方に新たな光をあてることで、異なる一般化や分析が可能になり、それが理論の発展の重要な転換点となることがしばしば起こってきた。そして、このラベル操作のアルゴリズムも、そうした転換点をもたらす可能性があると思える。本研究はそうした理論的発展の背景を持ち、特に、上記に述べた生成文法の枠組みの転換(標準理論→GB(PP)理論→ミニマリストプログラム(MP))の中で記述的分析・一般化に止まり、理論的考察から離れてしまっている現象や、統語理論の発展とは一線を画してきた語彙の意味の構造化の関係などが、この Label 操作(および、Label の素性のあり方)の観点から新たに分析できる可能性があると思われ、それを追求することで、理論構築に寄与することを目指す。

## 2. 研究の目的

研究代表者の長谷川は1970年代後期(生成文法理論の観点では標準理論から GB への移行期)から、統語研究に携わり、上記[1]で述べた理論的発展を熟知しているだけでなく、その発展の裏で「記述的分析」に止まり、理論的考察から外れてきている現象に対する知見の蓄積がある。その中から、(以下[4]の成果でもう少し詳しく述べるが)英語では「分詞節」の NP (DP) (短縮関係節)もしくは CP (主語を持つ分詞構文)の「構造的二重性」を、日本語では「の」を構造の主要部として記述的分析が成されてきた「主要部内在型関係節(DP)」と「助詞ニヤヲを伴う逆接の副詞節」の「構造的二重性」といった現象を、ラベル操作に許された曖昧性により分析し、2つの統語的構成物(Syntactic Object : SO)併合の際にラベルとして「勝ち上がる」構造素性に2つの可能性があるとして分析することにより、同じ派生の出発点から異なる構造が派生されるとの分析を提示し、ラベル操作の理論的妥当性を日本語と英語の経験的なデータから補強する。

また、統語理論が扱う表示は、語彙範疇の N, V, A, P、機能範疇の D, C, T が想定されており、それ以上範疇素性を分解して統語的構造構築に組み入れるという試みは限られている。しかし、範疇を下位範疇に分けて考える必要性が、語彙範疇では非対格性や格付与能力との関係で動詞主要部を V と v に分離させ、機能範疇では、C を補文のタイプや機能(情報構造やレジスターとの関わり、間接叙述や間接疑問文、叙実性)、T をアスペクト素性との関わりにより、下位主要部構造が想定されてきている。つまり、派生の「出発点」としてのラベル(を含む素性)が、派生の段階でどう生き残るかは、単に併合の際のラベルの生き残りの可能性(ラベル操作のアルゴリズム)だけでは不十分であると思われるのである。(Cecchetto and Donati 2015 も参照)本研究では、現在 MP で想定されている Chomsky (2013) の Label 操作(それは、併合される2つの SO メンバーの関係<だけ>で Label が決定されるとするものだが)に止まらず(それを、補完するか、それを改訂するか、については、理論の根源的な考察・討議が必要で、本研究課題では扱い切れない大きな問いとなるが、その問い以前に整理しておく課題として)、Merge されて勝ち上がったラベルが、その上位構造で解釈可能な SO となるのが条件に入るべきとの見通しを持っており、その必要性を経験的に示す。この方向性は、研究代表者の長谷川のこれまでの研究(CP 領域、情報構造との関係を考察した一連の研究; vP とアスペクトとの関係を考察した研究<sup>1</sup>)とも関連しており、本研究は、長谷川の統語研究の継続的な課題としての一貫性を持つことを指摘しておく。

<sup>1</sup> 研究代表者の長谷川は、科研基盤(B)課題番号 19320063 において、CP 領域と情報構造やレジスターとの関係を扱い、基盤(B)課題番号 23320089 で、文構造における機能範疇 CP-TP-vP (および AspP) の素性情報の相関を扱った。それらの成果を参照されたい。

### 3. 研究の方法

上記 [1] で述べたように、本研究では、理論的發展と関わる考察では中心的には扱われていなかったが、明らかに、派生とラベル標示と関係すると思われる現象を、既に記述的一般化が成されている現象に、ラベル操作から新たな分析の可能性を示すこと、および、ラベル操作の観点から、これまでの理論では予測されなかった構造や現象を洗い出すことを、研究活動の中心とした。そのため、日本語、英語ともに、標準理論時代からの記述的考察、構文解説、文法書などから、新たな視点でデータを集積し、ラベル操作の観点からの分析の可能性を追求した。同時に、国内外の研究者との意見交換を通し、データの整理・再分類、他言語との関係などを探り、[4] に記載する成果を得た。ただ、残念ながら、中間年度であった 2019 年度末から最終年度の 2020 年度がコロナ禍により、研究活動が大きく制限され、国内外の渡航（招聘を含む）が制限され、当初予定した程には精力的に国内外での意見交換や発表、国際ワークショップ開催による最終成果の公表には、至らなかった。

本研究課題の科研費の支援による研究期間は終了となるが、上記のように、本研究は研究代表者長谷川の研究課題の一環であることから、今後も研究を遂行し、機会を捉えて発表してゆく所存である。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果は、上記 [2] の研究目的で述べたように、Label 操作が派生の段階で異なるラベルを持つ SO を形成する現象を考察・分析し（以下、(A) 参照）、その分析を理論的に位置づけるには、付与された Label が SO として上位構造と関わり、かつ、意味解釈に参画できることが必要であることから、Label の情報が、Merge する SO からのみ決定されるのではなく、付与された Label を持つ SO が次に併合する SO との関係性を保証するメカニズムが必要であることを論じた（以下 (B)）。

#### (A) 構造の二重性を持つ現象の考察

本研究で主に扱ったのは、以下(1)~(4)の現象である。[...] がその研究成果を含む論文である。以下、[5] 参照。

(1) 英語：分詞節 ((a)短縮疑問文 vs. (b)主語を持つ分詞構文) [長谷川 2018]

- a. [The woman entering the room] is a spy.
- b. [The woman entering the room] everyone stopped talking.

(1a)の短縮疑問文の場合は、主語の the woman が ing を主要部とする TP に vP 指定部から内部併合する際、the woman のラベルが勝ち上がり、全体が DP のラベルを持ち、それが上位構造 (be の TP) 指定部で主語 DP と機能する。分詞構文の(1b)では、the woman が併合された際、ing を主要部とする TP のラベルが勝ち上がり、全体として TP (もしくは、CP) となり、上位構造では副詞的分詞句 (分詞構文) として意味に参画する。

(2) 日本語：「の」節 ((a)主要部内在型関係節、(b)知覚動詞の目的節、(c)逆接の副詞節)

- a. [ハエが飛んできたの] をたたき落とした。
- b. 花子は [ハエが飛んできたの] をただ見ている。
- c. [ハエが飛んできたの] を構わず食事を続けた。

(a)と(b)の構造については、長谷川(2002)の分析を踏襲し、各々が上位構造では DP と分析され、D が上位構造で Merge する際、D が  $\phi$  素性との Agree で、Probe となり TP 内部の DP を指定するか(a)、叙実的 DP とするか(b)で異なる。ラベルの二重性は(c)の副詞節との関係で、TP (もしくは CP) のラベルを持ち、上位構造では項としての意味役割は受けず副詞として機能する。このように考えることにより、主要部関係節が項の名詞句 (黒田 1999) か逆接の副詞節 (三原 1994) かの論争は、派生の段階でのラベルの違い (かつ、それが果たす上位構造での意味解釈の可能性) として分析できるのである。この(2)についての分析は、口頭での意見交換などで述べるに止まり、論文としての形にはできていない。今後の予定である。

(3) 日本語：「と」節 ((a)項として vs. (b)付加詞として (裸ト節)) [長谷川 2020]

- a. 父は [早く来いと] 言った。
- b. 父は [早く来いと] 手招きした。

日本語の従属節の形態と構造は、項か付加詞か、叙実的な否か、などで異なり、内部からの取り出し可能性に関係があること、内部のゼロ代名詞の解釈の違いがあることが分かっている。それらを整理した上で、(3)の「と」節は項か付加詞かで異なるにも関わらず、統語的振る舞いがほとんど同じであることを指摘し、構造の二重性が予測されるところで逆に単一の構造となること、それでも上位構造では意味役割の観点では異なる解釈となることを示し、以下 (B) での問題提起と関わるが、構造 (ラベル) の違いとは、別に、上位構造からの意味解釈を決定するメカニズ

ムの必要性を示す現象であると考えられる。

(4) 日本語：「は」主語と文タイプ（「定」時制主題文 vs. 属性文） [長谷川 2021]

- a. この窓は簡単に開く。
- b. この窓が簡単に開く。
- c. この窓 {が／は} 簡単に開いた。

これらの文の「この窓」はどれも、「定」時点での状態の記述として解釈できるが、(a)には、(b)(c)では観察されない、「この窓」の属性の解釈がある。「属性」解釈は「は」の存在のみならず、時制辞「る」が「恒常時制 (Generic Tense)」として解釈される必要があり、CP 領域の「は」要素と TP 領域の「る」の間の連動性を保証する必要がある。それには、単なる TP (もしくは CP) という範疇のラベルだけでなくその下位分類 (下位主要部) としてのラベル (素性) が必要であり、それが文全体の情報構造における意味機能と関わらせる必要がある。この現象は SO 内部からのラベルだけでは不十分であることを示すと思われ、上位構造との意味機能の整合性を保証するシステムの必要性を示す現象である。

(5) 日本語を含む言語一般の VP 内部構造について：結果構文からの考察 [Hasegawa 2021]

上記で扱ったのは、統語理論で最も典型的に想定されている範疇のラベルについてだが、VP 内部の意味役割と関わる下位範疇も SO およびラベルと考へ、そのあり方を、Reinhart (2002) の Theta Theory の素性 ([±cause] [±mental state]) がラベルとして機能する体系を想定し、日本語 (および英語) の結果構文の分析を提示した。研究代表者の以前の分析 (Hasegawa 1999, 2000, 2004) をさらに発展させたものである。

### (B) ラベル操作と意味解釈の関係性

本研究課題では、上記のような、派生の段階で複数の構造 (ラベル標示) の可能性をもつ現象を扱ったが、当該のラベルを持つ SO は上位構造に照らせば、ラベルの二重性・曖昧性は解消されるわけで、構造構築だけでなく意味解釈までを含むなら、そのラベルの二重性解消メカニズムも必要であるとの問題提起を行った。ただ、この問題提起は必然的に構造構築に look ahead する機能を持たせることになり、理論構築上必ずしも容易に受け入れられる方向性ではないかもしれない。しかし、そもそも構造に Label が必要なことは、その Label を持つ SO 内部の要請というより、その SO が上位の意味解釈に参画することを可能にするためである。そして、MP では、(以前の理論、例えば GB(PP)理論のように、膨大な量の派生を許しその中からインターフェイスで適切なアウトプットだけが生き残るといような体系ではなく) 派生の可能性をミニマルにすることが求められており、本研究で扱った「派生・構造の二重性・多重性」は、どの派生も上位構造の SO として解釈可能となる現象である。つまり、併合後の SO のラベルが併合段階で一義的に決まらなくとも、その SO が次に併合される時には、曖昧性が解消され唯一許されるレベルで意味解釈に参画するわけで、ラベルの決定に look ahead の性質を組み込むことは、MP の理念からも、言語が文に許す意味解釈の観点からも有用であると思われる。その look ahead の性質をどのように理論内に組み込むかは、今後の課題であるが、本研究課題ではその必要性・有用性を指摘した。

### <引用文献>

- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Cecchetto, Carlo and Caterina Donati (2015) *(Re)labeling*. Cambridge, Mass: The MIT Press
- Hasegawa, Nobuko (1999). The Syntax of Resultatives. In M. Muraki and E. Iwamoto (eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind*. 178-208. Tokyo: Kaitakusha.
- Hasegawa, Nobuko (2000). Resultatives and Language Variations: Result Phrases and VV Compounds, *Japanese/Korean Linguistics 9*: 269-282, Stanford: CSLI Publications.
- 長谷川信子 (2002) 「主要部内在型関係節：DP 分析」*Scientific Approaches to Language*, No. 1, pp. 1-33. 神田外語大学, 言語科学研究センター.
- 黒田成幸 (1999) 「主部内在関係節」『ことばの核と周縁』27-103, くろしお出版.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造 - 生成文法理論とその応用 -』松柏社.
- Reinhart, Tanya (2002) The Theta System-an Overview. *Theoretical Linguistics* 28, 229-290.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 長谷川信子	4. 巻 26
2. 論文標題 従属節のタイプと「クレル」の解釈 - 補文のト節・コト節、付加詞節、関係節、裸ト節 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語科学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 長谷川信子	4. 巻 24
2. 論文標題 英語の現在分詞節の構造と派生 - 縮約関係節と分詞構文 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語科学研究	6. 最初と最後の頁 83-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 長谷川信子	4. 巻 1
2. 論文標題 「は」の現代版「係り結び」現象と文タイプ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論文集『言語研究の楽しさと楽しみ』開拓社	6. 最初と最後の頁 320-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hasegawa, Nobuko	4. 巻 1
2. 論文標題 Serial Verb Resultatives: In View of the Refined VP Structure	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論文集『Papers from the Secondary Predication Workshop 2020』	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Nobuko Hasegawa
2. 発表標題 Serial Verb Resultatives: In View of the Refined VP Structure
3. 学会等名 The Secondary Predication Workshop 2020 (at Kobe University, On-Line) (招待講演)
4. 発表年 2020年～2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------